

フランス語で書く日本現代文学史

——その条件と可能性——

坂井セシル

本論はフランス語で日本現代文学史を書くということを通じて、理論的な背景や方法論について考えていくということが主たる趣旨である。歴史、文学、現代といった互いに矛盾を含んだ関係を結んでいる概念をどのように繋ぎ、まとめられるのかについて検討してみたい。最初に現在関わっている企画を具体的に説明したい。

1. フランス語で書く日本現代文学史とは

この企画は南仏アルル市にある小出版社、ピキエ社 (Editions Philippe Picquier) の刊行しているシリーズの一つとして準備されている。ピキエ社とは、アジア文学 (中国、日本、韓国、インド、ベトナム、等) の紹介を専門としている出版社で、日本文学の仏訳の発展に大きく貢献しているところである。

この文学史の企画の始まりは、中国文学の専門家、2000年のノーベル賞受賞者ガオ・シンジェン (高行健 Gao Xingjian) の作品の翻訳者でもあり、南仏エクス・マルセーユ大学教授のノエル・デュトレ (Noël Dutrait) がピキエ社から *Petit précis à l'usage de l'amateur de littérature chinoise contemporaine* (『現代中国文学愛読者のための小案内書』) を2002年¹⁾に刊行したことにある。フランスでは初めて、中国の現代文学が網羅的に紹介される機会を得たわけであるが、ここでの“現代”文学とは、1976年以降、つまり毛沢東の死以降の中国文学 (台湾、香港を含む) を指している。フランス語でそれまでにいくつかの中国文学史は発表されていたが、第二次世界大戦までを扱っているものばかりで、政治的な統制時代の文学やそれ以降のことは考慮に入っていなかった。つまりこの案内書で初めて最近の中国文学が紹介されている訳で、その直接的な動機は数年来のフランスにおける中国現代文学の翻訳の流行にある。2003年から2005年にかけての、フランス中国文化交流記念プログラムが徹底していて、例えば中国は2004年のパリ・ブックフェアのメインゲストとして脚光を浴びた。その年フランス語に訳された中国作品はなんと160点以上であり、例年の平均10 - 15点をはるかに上回る結果となり、表現の自由と活気を取り戻した現代中国文学が注目の的となったわけである。

この同じ案内書シリーズの中で日本の現代文学を扱うことになるのであるが、言うまでもなく、中国文学の場合とは違う背景、状況がある訳で、まずそれらを把握する必要がある。第一に翻訳史を考えると、1985年以来、浸透期を迎え²⁾、毎年平均20点から25点の日本の文学作品が翻訳、刊行されている。ちなみに2006年の目録 (資料1参照) を見るとざっと21点並んでいるが、『蜻蛉日記』や西鶴、あるいは鷗外の『舞姫』や『青年』が訳されている傍ら、いっぽうでは金原ひとみ (例外的に英訳からの重訳)、綿矢りさ、栗本薫、あるいは『バトル・ロワ

イアル』の高見広春と一緒に既成作家である小島信夫や獅子文六などが出てくると言う、非常に不統一³⁾な、しかし確実に日本文学のほぼ全貌を訳して行く過程の一段階が見受けられる。この目録は便宜上年別リストになっていて、翻訳推移研究を行う場合は、勿論のこと、より長いスパンで調査を行う必要がある。例えば、2005年に遡れば、今フランスで最も人気のある村上龍、小川洋子などの作品が軒並みに挙げられていて、現状をより良く表す目録となっている⁴⁾。いずれにしても、現時点で、総合数約450点の日本の作品（主に小説、短編集——戯曲、詩歌は少ない）がこの20年間で仏訳されてきた訳で、国際交流基金の調査によるとヨーロッパ諸国では一番多い数字となっている。

発行部数に関しては、フランスでは無名な日本の作家の場合でも1,500部ぐらいいは出回っていて、上記の知名度のある村上龍や小川洋子、あるいは村上春樹の場合は10,000部以上の売れ行きとなっている。そのような蓄積を基盤に、また表題の普遍的な響きなどの効果があって、2006年1月に刊行された『海辺のカフカ』⁵⁾のフランス語版は例外的にベストセラーのランキングに入り、数ヶ月で7万部の売れ行きという新記録に達成している。続けて、2007年1月に刊行された『アフターダーク』⁶⁾の仏訳は同じような水準に達してはいないが、いずれにしても、現在のフランスにおける翻訳の場を考えると、確かに日本文学は非常にマイナーな分野から、データに掲載される外国文学の一つとして認められるようになった、と言えるであろう。但し、総合翻訳点数の相対的な調査ではそれでも日本文学の仏訳の占めるシェアが2%弱で、英米文学の仏訳が70%⁷⁾に達している事実を見失ってはいけない。この英米文学の支配は日本国内を含む世界的な傾向であるにせよ、急に日本文学が一世を風靡しているような錯覚に陥ってはならない事に注意しておきたい。

さて、このような状況の中で、フランス語での日本文学に関する学術的な諸言説——研究書、文学史、伝記、評論など——は十分に対応しているか、というと、現状は厳しいと言わざるをえない（資料2参照）。専門家が少ないということと、出版社のほうでも研究の分野は需要（つまり買い手）が少ないという認識のもとで、発展性がないのである。また、いくつかある（加藤周一、西川長夫など）フランス語の日本文学史や研究は1970年代、新しくても1980年代で章を終えている。

ここにフランスにおける日本文学の受容の問題が生じる。つまり、日本学者ではない、日本文学愛好家の一般のフランスの読者は、1970年代以降の日本文学の情勢、動向などが全くつかめない環境にいるのである。三島由紀夫、川端康成、谷崎潤一郎、安部公房、大江健三郎、井上靖といった西欧圏で確かな地位を築いてきた作家たち⁸⁾のあとは、洪水のように作家群、異種のジャンルの異質の作品が押し寄せているのである。今回の日本現代文学案内書とは、このような状況に応えるための、非常に具体的な手引きの役割を果たすのが第一の目的である。

要するに簡単明瞭な企画で、いろいろと考えるのも取越し苦労だと言われかねない。しかし、実は案外難しい課題なのである。第一に先行の70年代以降を扱った網羅的な参考書があるか、と言えば、私の知る限りではそのようなものは日本語ですら存在しない。換言するならば、模範、あるいは規範となるものは無いのである。それは、この主題が扱いにくいからで、その点に関しては後ほど検討するが、とにかく残るは以前の文学史や案内書の構造や枠組みをなぞって、それ以降の未知のものとしての本を執筆することになるのである。

但し、言うまでもなく、参考文献になる資料は山ほどある。第一夥しい量の作品自体が中心的なコーパスをなす訳で、それ以外にも新潮社の『文芸年鑑』や各種文芸誌、文芸辞典等が使える。その他数多い文芸評論という題材も、現代文学を扱っているものが多く、それによって主な傾向や、作家作品の選択、解釈のマーカ―として分析することができる。ざっとアトランダムに今活躍中の評論家の名前を挙げるならば、加藤典洋、榎本正樹、小森陽一、清水良典、中条省平、三浦雅士、斎藤美奈子、沼野充義、福田和也、川西政明、芳川泰久、川村湊、川本三郎、千野帽子（ペンネーム）、中川成美⁹⁾といった専門家たちは確かに現代文学に言及していて、非常に参考になる批評を展開している。新聞などもいろいろと示唆的な文面を提供してくれ、例えば「朝日新聞」、2006年12月7日朝刊の「天声人語」は文芸誌の一月号広告の重要性を説き、日本の文学が未だにそのような媒体を持って発表されている特異性を重視している。そして、その翌日の同「朝日新聞」朝刊には、前日予告されていた、文芸4誌の総目次が並んだ。『文学界』、『群像』、『新潮』、『すばる』の2007年1月号の広告を見ると、編集者たちが作る目次構成の中で、大江健三郎や保坂和志が3誌に、堀江敏幸、金原ひとみ、荻野アンナ、他が2誌に、と創作、エッセー、寸評を交えてメジャー、マイナーなどが良く解るように一斉に登場している。こういった情報も考慮に入れる必要がある。

このように観察してくると、基本的な情報は全部そろっている、と言えるであろう。さて、その中で、日本現代文学史のようなものを立ち上げるのが困難で、そのための条件を検討する必要がある、ということ、方法論的に考察してみたい。

2. 方法論的背景を考える

ジャン・スタロビンスキーはその著名な研究書、『批評の関係』(Jean Starobinski, *La relation critique* (L'œil vivant II), Gallimard, nrf, 1970)の「批評の意味」(Le sens de la critique, p. 9-33)という章の冒頭で、理論と方法の違いを明晰に説明している。理論(théorie)は総合的な観点を持って、仮定を証明するために展開されるものであるのに対して、方法(méthodologie)とは、技術的な道具を組み立ててコード化し、それを持って批評の仕事を照らし合わせるものとして、ここでは、その方法論的なアプローチを使って、現代文学史の枠組みを明らかにしたい。

A) 文学史という概念の有効性

初歩的な問題としては、現在において、果たして文学史という概念自体が通用するのだろうか、を問う必要がある。19世紀のヨーロッパで育成され、その後明治期後半にその影響を受けながら日本でも構想されたこの概念¹⁰⁾は、一世紀以上経った今、また文学的な批評の構築が脱構築などを持って、完全に覆されてしまった今、どのような認知的な価値を保持することができるのであろうか。文学史も人文系の理論の枠組みに入る訳であるが、フランス発信の70年代構造主義、そしてポスト構造主義以降の理論的土台は、カルチュラル／ジェンダー／ポストコロニアル・スタディーズなどの一部活発なところ以外は「荒れ地」¹¹⁾といったような状況で、その中でも、文学史という一昔前の考え方は見向きもされない風潮がある。

しかし、文学史の代わりになるような現実を解釈する新しいシステムが編み出されない限り、

やはり文学史的な仕事の意味は残ると考えられる。ただし、その前提は19世紀の国家形成ロマン思想のものではなく、文化社会学、コミュニケーション理論などを踏まえた新しい土台のもとで構築されて行かなくてはならない。特にドイツ、コンスタンツ学派の文化社会学者、ハンス・ロベルト・ヤウスは、『挑発としての文学史』（Hans Robert Jauss, *Literaturgeschichte als Provokation der Literaturwissenschaft*, 1967）¹²⁾ という名著の中で、19世紀の文学史（Gervinus, Scherer, Lanson, De Sanctis, etc.）から脱皮するためには、理想主義を捨てなければならない、ということをお説している。ヤウスの批判は鋭く、従来の文学史の歴史学的な土台や位置付けの欠陥と同時に、美学的な曖昧性を指摘している。「文学史はその対象、つまり芸術のひとつの形としての文学、が必要とする美学的な判断を正当化することが全くできないでいる。」(p. 23) そして、マルクス主義的アプローチ、及びロシア・フォルマリズムなどを検証してから、新しい文学史の可能性を次のように提示する。「生産と表象の美学が成す閉ざされた回路は解放され、(…) 受容と生産の効果の美学への出口を見つけなければならない。」(p. 45) 周知のように、ヤウスはここで読者の重要性を力説し、かれらの創造への加担、例の“期待の地平”の創作における役割などを分析して行く仕事を繰り広げる訳である。

この読者という概念はその後、その曖昧さ故に批判され、イーザー（Wolfgang Iser）他の理論家により、細かく分析されるようになったが、いずれにしても、ここで改めて、文学史とは文学という文化の一フィールドを把握する、社会歴史学に所属するアプローチとして、蘇生した、と言えよう。一応私もこの観点を出発点とする。

B) 文学の終焉？

さて、文学史だけではなく、文学自体の終焉が話題になる今日このごろである。世界的な傾向ではあるのだが、日本文学に関しては、例えば柄谷行人の『近代文学の終わり』という論文が表題となったエッセイ・インタビュー集（インスクリプト、2005年）があり、他にも、川西政明の『小説の終焉』（岩波新書、2004年）といった“近代日本文学案内”（とカバー内側に書いてある）などがある。柄谷行人は『早稲田文学』（2004年5月号、後全面改稿）に掲載された「近代文学の終わり」という2003年、近畿大学で行われた講演をこのように始める。「今日は「近代文学の終わり」について話します。それは近代文学の後に、たとえばポストモダン文学があるということではないし、また、文学が一切なくなってしまうということでもありません。(…) 文学が重要だと思っている人はすでに少ない。(…) むしろ文学がかつて大変大きな意味をもった時代があったという事実をいってまわる必要があるほどです」(p. 36)。その近代国家形成と近代文学の密接な関わりに関する挑発的な論考をたどって行くと、小説を中心とした近代文学は、80年代に終わり、中上健次の死を持って完全に終焉し、それ以降、というべきか、それ以外の文学はあるいはグローバリゼーションの中で限りなく商品化されてゆくか、または「孤立を覚悟してやっている少数の作家」(p. 59) のいくつかの作品がかりげに生き延びているというやはり“荒れ地”的な風景が描かれている。

他方、川西政明はほぼ同じスタンスで明治以降120年の文学史を顧み、「小説の潮流はだいたい二十年か三十年で変わるものである(…) それでも変わらない基軸のようなものはあった。」(p. i-ii) と言い、私、家、戦争、歴史、性、神などといったテーマが全く無能になってしまってい

る状態を嘆いている。「小説がこのまま生き延び、持続するためには、百二十年の歴史が積み上げてきた豊饒な世界を凌駕するまったくあたらしい小説の世界が生み出されなければならない。」(p. iv)とも冒頭で書いている。そして最終章では、その凌駕する世界を今だに創造することができないという暗黙の前提によって、「村上龍、村上春樹、島田雅彦、笙野頼子、松浦理英子、多和田葉子、川上弘美、小川洋子、よしもとばなな、高橋源一郎、藤沢周、奥泉光、保坂和志、堀江敏幸、阿部和重、あるいは舞城王太郎、綿矢りさ、金原ひとみ」を列挙している (p. 212)。

このような説では、19世紀以来の近代文学が終わったという認識が20世紀後半、21世紀の文学の可能性を否定するような事実として捉えられているのが気になる。過去を尊重するためには現代を切断する必要があるのであろうか。川西が挙げる作家群は明らかに現在の新しい、近代文学を踏まえながらも、異なるパラダイムを追求してゆく、まさに現代文学を担う作家たちではないであろうか。世代的なギャップに批評が左右されるのは危険だと思われる。

C) 現代史について

さて、方法論的な背景の最後の点は、歴史学が現代というコーパスをどのように把握しているのか、という問題にごく簡単に触れたい。原則的に現代史という学術的分野は最近構築されたものである。従来の歴史学の規範から言うと、図式的に言うならば、一定の時間的な距離を持って、客観的に過去を整理、解釈するものとして存在していた。現にフランスで現代史 *Histoire contemporaine*, *Histoire du temps présent* といった時には、第二次世界大戦、あるいは60年代までを扱った研究書を指しており、それ以降の事実は考慮には入らなかったのであるが、20位前から *Histoire immédiate* (Immediate History)、“即時”という形容詞がついて、やっと20世紀後半が扱われるようになった。例の客観性を保持するための方法が編み出され、例えば統計学の導入や現象サイクルの分析、あるいは生きた歴史学として、証人たちのインタビュー、参与観察型 (*observateur impliqué*) の地域調査、他が盛んに行われるようになった。人類学や社会学との連携も強化され、とにかく現代、あるいは超現代という時空間を扱うことは正当化された、と言えよう。従って、現代と繋がった現代文学を扱うことも学術的には可能になっていると、言える。

3. フランス版日本現代文学案内の枠組み

以上背景的なことを述べてきたが、具体的に日本現代文学の案内書を書くべく基準や枠組みについて言及する必要がある。それはどのようなスパンを決定し、どのような分類方法を使い、そしてどのような作家作品選択を行うか、という主に三つの問題を扱うことになる。

まず、年代的な標準作りであるが、始まりと終わりのラインを、多分に恣意的であることを承知で、描いてゆくの前提である。近代文学と区別される現代文学といった表現は、従来の日本文学史を見ると、大正時代まで遡ることもあれば、昭和文学、あるいは戦後文学を指すこともある。つまり観点によって、区切りが大きく揺らいでいる訳であるが、ここでは、あえて独断的に1970年というメルクマールを現代文学 (*Littérature contemporaine*) の発足の年として設定する。1970年とは象徴的な事件として三島由紀夫が自殺した年であるだけでなく、安保

や学生運動に日本の社会が大きく動揺した時期でもあり、また、所謂戦後生まれの作家たちが実力を発揮しはじめ、新しいスタンスで日本の戦後を埋葬すべく作品を発表し始めた時期でもある。この視点は例えば中条省平編『三島由紀夫が死んだ日』及び『続・三島由紀夫が死んだ日』（実業之日本社、2005年）で展開されている批評に近く、70年代までの文学を本格派として、それ以降の文学を変格、ポストモダン、知の戯れ派と称しても良い訳である。つまり、根本的に恣意的でありながらも、いくつかの根拠に基づく判断である。

終わりのラインをどこで引くか、という問題はさらに複雑で、象徴的な事件が起こらない限り、平成文学が昭和文学の延長線上に位置付けている限り、結論は今のところ無いと言えよう。これは次代の批評家、研究者たちの課題となるであろう。

次に分類方法であるが、これは一言で言うならば、ジャンル編成の問題である。1970年をめぐりに考えると、ざっと35年以上の文学場を観察して行かなければならない訳で、^{ダイアクロニー}通時性と^{シンクロニー}共時性をどう連結させるか、という難問に答えなければならない。特に文壇という文学場を形成してきた形が崩壊し、その後無理を承知で批評家たちが世代別に、あるいは所属同人誌別に作家たちを扱おうとして失敗していることを考えると、複雑極まる事態であることは一目瞭然である。つまり、現状はあくまでも、個人としての作家がある訳であるが、それでは紹介も整理も不可能、という結果になってしまう。そこで、やはり未だに機能している整理方法として、文学ジャンルを中心に置くことにする。ジャンルとは、様々な理論的な考察が分析しているように、制作者、需要者、批評家、メディア、出版制度などが複雑に絡み合っ^て構築される文学コードなのである。それを踏まえて、価値断層、序列などを破棄し、従来の形成済みのジャンル意外に、成立過程にある新しいジャンルをも発掘してゆきながら、総合的な、かつ積極的な考察を展開することが必要かと思われる。従来のものとしては、純文学の末裔や、旧大衆文学と言われていた中での時代小説、推理小説、SF、ホラー、恋愛小説、官能小説、ヒューモア、風刺小説があり、新しいものとしては女性の書いた文学としてのアイデンティティー性が強い、しかしフェミニスト文学とは異なる女性文学（この点については論議の余地あり）、ワールドリテラチュアー（元はイギリス旧植民地国出身の作家たちの活躍する英語文学を指し、現在では、国境や言語の壁を超えて活躍する文学者たちの作品を指す）、J文学、eリテラチュアー、ビジュアルノヴェルなど、新メディア、マンガ、アニメなどの分野と連鎖するジャンルが挙げられるであろう。

以上のような枠組みを立てたところで、作家作品の選択という、さらに困難な作業が残る。『日本現代小説大事典』（明治書院、2004）の付録、生年一覧（pp.1489-1495）を基盤に計算しても、戦後生まれで400名あまりの作家がおり、70年代以降もおおいに活躍している戦前の作家も考慮に入れると驚く人数になってしまう。そこで、再度の独断的な処置として、企画されている案内書の規模も考え、作家言及は100名あまり、その内より細かく紹介されるのは30名位、といった決して円満ではないマクロ的な処置を取らざるをえない。肝心な選定基準は、というと、まず模範的な、客観的な、見取り図は存在しない、と言い切ってから、この企画の元々の条件に戻って考えたい。

最初に説明してあるように、日本の現代文学をフランスの読者のために解説するのが第一目的であり、その意味では典型的な異文化交差の場に位置付く仕事である。換言するならば、指

標になるのは、日本国内の評価よりは、翻訳を媒介したフランスにおける知名度や評価であり、ここに一つの大きなずれ、あるいはひねりが生じる訳である。翻訳の場と文学生産の場のずれでもあり、フランス対日本という構図だけではなく、広く翻訳のプロセスの特徴と関わる問題群と関係している。但し、トランスレーション・スタディーズが明らかにした思想的な、支配被支配の構図による操作を考慮に入れつつ、翻訳されたものと、さらに翻訳され得る、フランスでは無名な作家も紹介するのが、規制のカノン構成を揺るがすことになり、使命でもあるかと考えられる。現在の時点では、例えば、笙野頼子、金井美恵子、高橋源一郎、清水義範、江國香織、古川日出男、松浦寿輝、梨木香歩、などの作品は仏訳されていないが、いつかは紹介されるであろうことが想像される。究極的には、日本での評価と案内書を書く責任者——つまり私自身——の判断が問われる訳で、異文化間コミュニケーションに携わる身としては、確実に個人的なコミットメントが要求される次第なのである。

4. 結論にかえて

文学史の話をしながらか、実は案内書の枠を追求する、という曖昧な論を提示してきた訳であるが、このフランス語で書く日本現代文学案内書というのは、異文化交差 Interculturalité という条件が生み出す特殊な本なのである。仮に日本の読者向けの本を書くならば、自ずから、翻訳という基準を軽視、あるいは無視する文学史のほうへと衣替えするであろう。いずれの場合の大前提としては、70年代以降の日本の現代文学が、出版マーケットの必死な競争体勢に支えられ、多様、多彩、独創に満ちていると、個人的な観測から、断言できる¹³⁾。21世紀の文学としての作者と読者を結ぶ新種ゲームとしての文化的約束を確実に構築してゆく過程にあるからである。それは、比較文学的に見ても、例えば現状のフランス文学の衰退を考えれば、なおさら明らかになることである。

高橋源一郎の『日本文学盛衰史』（講談社、2001）に登場する漱石、鷗外、花袋、啄木などはカラオケで歌ったり、アダルトビデオに出演する。この面白くもあり、悲しくもある小説を読んで、当時のすばらしき近代文学の担い手たちの作品は、果たして、今現在、誰が、どのようにして、読んでいるのであろうか、という不安にかられる。近代文学こそが読まれなくなる、という危機にさらされて、かろうじて学校や大学といった教育制度が記憶をつなぎ止めるために文学史というものを確保しているのではないか、とも考えられる。となると、70年代以降の日本文学史がいつか日本で書かれる時は、過去のものとして、もう読まれなくなってしまった文学としてであろうか。逆説的であるにせよ、読者の不在が記憶装置としての文学史を今後も必要とするのかもしれない。

付記

この講演原稿はさる2006年12月8日、Scuola Italiana di Studi sull'Asia Orientale (ISEAS)、及びEcole Française d'Extrême-Orient (EFEO)共催のKyoto Lecture Series 2006 « On the History of the Present Day : How to write a History of Contemporary Japanese Literature »の英語の原稿に案を得、加筆修正したものである。

注

- 1) 補足として、改訂版が2006年に同出版社から刊行されている。
- 2) 翻訳史に関して詳しくは拙著「フランスにおける日本文学」、『日本近代文学』第66集、2002年5月、及び、「翻訳の力学—日本文学のフランス語訳について」、明治学院大学言語文化研究所『言語文化』第22号、2005年3月、参照。
- 3) 作品が翻訳に至るまでのプロセスは様々で、そのためあまり一貫性のない総覧になる。例えば、村上春樹などの商業ベースの翻訳もあれば、学術的な作業としての翻訳もあり、また翻訳者個人と作家個人の私的なつながりから生まれる翻訳もある。そして、小島信夫や獅子文六の場合は、日本の文化庁の2002年に始まった英語、フランス語、ドイツ語、ロシア語に向けての現代日本文学の翻訳・普及事業の枠内で、推進されるべく推薦されている。文化庁の委託財団、NPO法人日本文学出版交流センター(J-Lit)は翻訳料や出版物の一部の買い取りで事業を支えている。ただし、選択基準が日本発信ということは必ずしも各国の翻訳の現場を意識したものではなく、翻訳されても受容の場がない作品もある。
- 4) 詳しくはフランス日本研究学会(Société Française des Etudes Japonaises)のホームページに発表されている出版目録を参照のこと。<http://sfej.asso.fr>
- 5) *Kafka sur le rivage*, trad. Corinne Atlan, Paris, Belfond, 2005.
- 6) *Le passage de la nuit (After dark)*, trad. Hélène Morita, Paris, Belfond, 2007.
- 7) Georges Gottlieb, « Jalons pour une histoire des traductions françaises au XXe siècle », *France-Asie, un siècle d'échanges littéraires*, M. Détrie ed., Paris, You Feng, 2001, を参照のこと。
- 8) 先行研究が示しているように、これらの作家の外国における位置付けというのは、アメリカの日本学者兼翻訳者たちが60年代に構築していったカノンで、そのままヨーロッパ諸国などによって受け入れられたものである。詳しくは、Edward Fowler, « Rendering words, traversing cultures : On the art and politics of translating modern Japanese fiction », *Journal of Japanese Studies*, 18, 1-44, 1992 ; Lawrence Venuti, « Translation and the formation of cultural identities », *Cultural Functions of Translation* (Schäffner C., Kelly-Holmes H. eds), Clevedon, Philadelphia and Adelaide, Multilingual Matters, 1995.
- 9) 以上の評論家のほとんどが大学教員であることは興味深い。
- 10) この問題については、Emmanuel Lozerand, *Littérature et génie national – Naissance d'une histoire littéraire dans le Japon du XIXe siècle*, Paris, Les Belles Lettres, coll. Japon, 2005 が詳しく論じている。
- 11) 人文関係批評の批判はフランス国内では、例えば中心的な批評家で、2006年12月にコレージュドフランスの教授に任命されたアントワヌ・コンパニオン (Antoine Compagnon, *Le démon de la théorie*, Paris, Seuil, 1998, rééd. Points 2001) が展開していて、英米圏では、ジャン・ブリクモン、アラン・ソカル (Jean Bricmont, Alan Sokal, *Impostures intellectuelles*, Paris, Odile Jacob, 1997 ; *Fashionable Nonsense : Postmodern Intellectuals' Abuse of Science*, New York, Picador, 1998 ; *Intellectual Impostures : Postmodern Philosophers' Abuse of Science*, London, UK, Profile Books, 1998) が痛烈、かつ風刺的な批判を出版し、論議を醸し出している。
- 12) 巒田収訳、岩波書店、1976年。ヴォルフガング・シャモニ (ハイデルベルク大学) の論文「『序』の文学史のために」でも、やはりヤウスの論が基盤となっている (『文学』, 2006年7,8月号, 岩波書店)。
- 13) 2007年1月9日の朝日新聞朝刊には丸谷才一のインタビューが掲載されていて、近代文学より現代の日本文学のほうが洗練されていて、繊細であると言い、川上弘美、高樹のぶ子、江國香織の「言葉の使い方がきゃしゃで、みずみずしい」とほめ、また村上春樹や池澤夏樹の新しさを論じている。三浦雅士、鹿島茂、丸谷才一、『文学全集を立ちあげる』(文芸春秋、2006)では私小説や自然主義が痛烈に批判され、文学の終焉派の柄谷、川西らとは違うポジションを示している。

参考資料

資料 1

2006 年日本文学伝訳目録

小説

- Fujino Chiya, *Havre de paix* (Oshaberi kaidan), trad. du japonais par Dominique Palmé et Kyôko Satô, Paris, Editions Thierry Magnier, 2006, 239 p.
- Fujiwara no Michitsuna no haha, *Mémoires d'une éphémère* (Kagerô nikki), trad. du japonais par Jacqueline Pigeot, Paris, Institut des Hautes Etudes Japonaises, Collège de France, 2006, 342 p.
- Horie Toshiyuki, *Le pavé de l'ours* (Kuma no shikiishi), trad. du japonais par Anne Bayard-Sakai, Paris, Gallimard, 2006, 112 p.
- Ihara Saikaku, *Chroniques galantes de prospérité et de décadence* (Kôshoku seisui), trad. du japonais par Daniel Struve, Arles, Picquier, 2006, 224 p.
- Ikezawa Natsuki, *Les singes bleus* (Hachigatsu no Purinius), trad. du japonais par Yutaka Makino, Arles, Actes Sud, 2006, 255 p.
- Inoue Yasushi, *Le Sabre des Takeda* (Fûrin kazan), trad. du japonais par Marie-Noëlle Shinkai-Ouvray, Arles, Picquier, 2006, 292 p.
- Kanehara Hitomi, *Serpents et piercings* (Hebi ni piasu), trad. de l'anglais, par Brice Mathieussent, Paris, Grasset, 2006, 163 p.
- Katayama Kyôichi, *Un cri d'amour au centre du monde* (Sekai no chûshin de, ai o sakebu), trad. du japonais par Vincent Brochard, Paris, Presses de la Cité, 2006, 232 p.
- Kirino Natsuo, *Out*, trad. du japonais par Nakamura Ryôji et René de Ceccatty, Paris, Le Seuil, 2006, 570 p.
- Kojima Nobuo, *Le cercle de famille* (Hôyô kazoku), trad. du japonais par Elizabeth Suetsugu, Arles, Picquier, 2006, 231 p.
- Kurimoto Kaoru, *Guin Saga 1. Le masque du léopard* (Guin Saga 1.), trad. du japonais par Dominique Lavigne-Kurihara, Paris, Le Fleuve noir, 2006, 248 p.
- Kuroyanagi Tetsuko, *Totto-chan, la petite fille à la fenêtre* (Madogiwa no Totto-chan), trad. du japonais par Olivier Magnani, Presses de la Renaissance, 2006, 293 p.
- Matayoshi Eiki, *Histoire d'un squelette* (Jinkotsu tenjikan), trad. du japonais par Patrick Honoré, Arles, Picquier, 2006, 248 p.
- Mori Ôgai, *La danseuse* (Maihime), trad. du japonais et postfacé par Jean-Jacques Tschudin, Monaco, éditions du Rocher, 2006, 90 p.
- Mori Ôgai, *Jeune homme* (Seinen), trad. du japonais par Elisabeth Suetsugu, Monaco, éd. du Rocher, 2006, 254 p.
- Okamoto Kidô, *Fantômes et kimonos: Hanshichi mène l'enquête à Edo* (Hanshichi torimonochô), vol. II, trad. du japonais par Karine Chesneau, Arles, Picquier, 2006, 260 p.
- Shishi Bunroku, *L'école de la liberté* (Jiyû gakkô), trad. du japonais par Jean-Christian Bouvier, Monaco, éd. du Rocher, 2006, 300 p.
- Takami Koushun, *Battle royale*, trad. du japonais par Tetsuya Yano, Patrick Honoré, Simon Nazay, Paris, Calmann-Lévy, 2006, 567 p.
- Wataya Risa, *Install* (Instôru), trad. du japonais par Patrick Honoré, Arles, Picquier, 2006, 96 p.
- Yoshiyuki Junnosuke, *Jusqu'au soir* (Yûgure made), trad. du japonais par Sylvain Chupin, Monaco, éditions du Rocher, 2006, 156 p.

詩歌

- Kobayashi Issa, *Mon année de printemps* (Ora ga haru) trad. du japonais par Brigitte Allieux, Nantes, Editions Cécile Defaut, 2006, 159 p.

マンガ

毎年 200 点あまりのマンガがフランスで出版されていて、現在日本の次に大きい市場となっている。目録はフランス日本研究学会のホームページ参照。Société Française des Etudes Japonaises (SFEJ) : <http://sfej.asso.fr>

資料 2

仏、英の日本文学史、研究選

- De Vos, Patrick (ed.), *Littérature japonaise contemporaine - Essais*, Bruxelles/Paris, Labor/Picquier, 1989.
- Gottlieb, Georges, *Un siècle de romans japonais*, Arles, Picquier, 1995.
- Guillaumaud, Jean, *Histoire de la littérature japonaise*, Paris, Ellipses, 2002.
- Karatani Kôjin, *Origins of Modern Japanese Literature*, trad. Brett de Bary, Durham, Duke University Press, 1993 (Japanese edition 1980).
- Katô Shûichi, *Histoire de la littérature japonaise*, trad. Dale Saunders, 3 vol., Paris, Fayard/Intertextes, 1985-1986 (Japanese edition 1975-1980).
- Keene, Donald, *A History of Japanese Literature*, 4 vol., New York, Columbia University Press, 1999.
- Konishi Jin.ichi, *History of Japanese Literature*, 3 vol., trad. Aileen Gatten, Nicholas Teele, Earl Miner ed., New Jersey, Princeton University Press, 1984, 1986, 1991.
- Lozerand, Emmanuel, *Littérature et génie national - Naissance d'une histoire littéraire dans le Japon du XIXe siècle*, Paris, Les Belles Lettres, coll. Japon, 2005.
- Nishikawa Nagao, *Le Roman japonais depuis 1945*, Paris, PUF, coll. Ecriture, 1988.
- Origas, Jean-Jacques (ed.), *Dictionnaire de la littérature japonaise*, Paris, PUF, coll. Quadrige, 2000.
- Pigeot, Jacqueline et Tschudin, Jean-Jacques, *La littérature japonaise*, Paris, PUF, coll. Que sais-je, revised edition, 1995.
- Sakai, Cécile, *Histoire de la littérature populaire japonaise - Faits et perspectives (1900-1980)*, Paris, L'Harmattan, 1987.
- Sieffert, René, *La littérature japonaise*, Paris, POF, 1973.
- Suzuki Sadami, *The Concept of « Literature » in Japan*, trad. Royall Tyler, Kyôto, Nichibunken Monograph Series n. 8, 2006 (Japanese edition 1998).
- Tschudin, Jean-Jacques, *Le Kabuki devant la modernité*, Lausanne, L'Âge d'homme, 1995.